

浅野 右瀬戸

昔年浅野氏の入所持より、一卷の名もなる、淡路国浅野をよる歌新景恋ニ入道前右大臣

いふさままのいふさまはゆふの浅野氏をいふさまを

雉子もいふさまはゆふの浅野氏をいふさまを

おとせいふさまはゆふの浅野氏をいふさまを

破被 右瀬戸

いふさままのいふさまはゆふの浅野氏をいふさまを

孤蓬菴主之筆蹟見書之次人呼「小壺目破被此小壺則

師叔八筆跡也

菴主所與春日宮入一物也右之一首者予師叔仙嶽禪師閑居雜詠也并頌曰

常聞松門百不聞遠離野菜蝶紛々風流文物非吾車紙被一張眠白雲

重而請記之頌歌之外別有什麼需同如破被咲倒紫袍錦綉則此小壺如視無量珍室者乎松風元來茶聲汝穩坐閑居而觀之不勞千金價可樂其樂古人云貧者士之常有何憂哉書以代銘矣

槽袋子亂過

志々良 金華山 新古神祇中院入道右大臣

乱過八書留人辞
オノミガリニ書ト
ムト云一過ハ止也

ミカニノ又も又まぐれノ一カキノ葉ノ花ノ白クシテ
浅茅 右瀬戸 新後秋上前中納言俊定

色也ニシテ花ノ白クシテ葉ノ花ノ白クシテ花ノ白クシテ

白菊 密所未考

るいありと推ふるに花ノ白クシテ葉ノ花ノ白クシテ

白露 金華山 源氏寄木

ミカニノ又も又まぐれノ一カキノ葉ノ花ノ白クシテ

山の井 密未考 大和物治

淡香山ノ花ノ白クシテ葉ノ花ノ白クシテ花ノ白クシテ

淡標 後密 源氏

ミカニノ又も又まぐれノ一カキノ葉ノ花ノ白クシテ

思河 藤四郎 續後撰春下定家

山吹ノ花ノ白クシテ葉ノ花ノ白クシテ花ノ白クシテ

宮城野 同上 千載秋上源俊頼

ミカニノ又も又まぐれノ一カキノ葉ノ花ノ白クシテ

雲井 金華山 後撰恋田ノ人きり

ミカニノ又も又まぐれノ一カキノ葉ノ花ノ白クシテ

木下 同上 新古春下康資王母

山ざくろのり風吹むくろよのまごころの誓しけしきん

木栝 金華山 新古秋下権中納言長方

花巻川流くふもさくらんてあおぢいけしのおごころれ丸

玉栢 同上 千載恋一源俊頼

ふんじの藻の埋もて玉栢あふんじのふんをさげんや

け茶入の良が茶室と云者攝津国難波の浦とて取どり

後西院印宸筆掛物漆 外風早殿手紙漆

たごひあやも里は漢のまゝあごてんらいまはまゝかゝり玉栢

茶入ん申すのゆゑ幸かの一首めはく

名物類聚小玉栢を常盤とありて箱のときなる松のみどり

なほこれ今にたゞはるをたまふあり此奇を書きり 後西院の印

宸筆掛物并風早殿手紙も漆とありて玉栢の印跡あり常盤ハ

別の茶入あらばきつ不多明のまきなり

増鏡 破風窓 拾遺恋田人丸

まごころのみごころ持て細かくてあはれも思ふあはれ

名物類聚小増鏡の箱書付まごころみそさくらんてあはれ

えんごもふんてまごころあはれもあはれもあはれもあはれ

せんや

布引 破凡 于載雜上 藤原良清

まきのくぎりかあきの敷あらうたうのもさき布引りて

妹背山 金華山 新勅撰雜四権中納言国信

あきびしあまひらりたるまきりてんあまひらりてんあまひらりてん

盤余野 同上 續拾秋上 前内大臣

とぎら花維ふらえききりてんあまひらりてんあまひらりてん

吳竹 同上 壬生集 西家隆

丸あきりてんあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

垣祢 破凡 滋紙手 六百番有家

あきりてんあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

霜夜文琳 右願戸 右今條諸よみ人きりてん

とぎらあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

允器物の名手ハ其時々入のあまひらりてんあまひらりてん

右歌右清かよあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

其物の似合いあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

名号の子細も皆其人あまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

あまひらりてんあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

又考へるをも書かへんあまひらりてんあまひらりてんあまひらりてん

不刊

悉く空室をさし中へなる物もさし猿猴の目ふら
しき業ならん

一瀬戸密所

瓶子密 藤四郎唐物を焼

祖母懷密 此所をうとくやくし焼く云上作

赤津密 此密ハ主の名字を赤津と云上作

信野密 信濃と美濃の境を焼上作

妻木密 所の名あり上作

大萱密 所の名あり上作

落合密 所の名あり上作

鳴海密 所の名中作

觸密 下作物

大平密 下作物

伊勢密 伊勢境を焼

大密 此密の焼物ハサミ類の出来物あり世の重宝

たるべき物殿様密と云

右十二ヶ所密所ハ新の沢山なる所を移入て茶入を焼
たり密所ハより手曲引を土茶ふありひ有と云

一土

紫土 白土 赤土 鼠色土 唐物に有るもの濃薄あり

浅黄土 濃薄あり 朱土 赤き茶を云唐物にあり

土器色土 田土 ツツ子土 白色を云

緋底 緋色 毛ハ紙焼て赤色天然に出るを云

漉土 土を何遍もく水洗していさぎ茶入の作る是ハ上の土

と云ふの器四角 春茶唐物にあり

右十二品

一薬

青薬 濃薄色茶入の作るものあり

黄薬 濃薄色上茶流しに茶あるものあり

柿薬 濃薄下茶のあり一面に有るものあり

白薬 薩戸焼紙終焼捨賣茶に有るものあり

黒薬 濃き艶能く作るものあり

胡上薬 生海茸茶青江茶の作るものあり

沙羅薬 小砂の交るぬくさうく地層の作るものあり

黄茶もの九手の茶のあり

蛇蝎薬 石籠子色の茶唐物に薩戸焼のものあり

大用前書

梨目藥 ナシメ まき梨子の実乃如く細きなる香き地あり

硃砂藥 ホウシヤ 黄茶より少く淡き^{アハ}てありき茶より

飴藥 黒色赤色黄茶をまぐの^{アハ}色あり

茶藥 黄茶青茶をくたまぐあり

金氣藥 サビ 錆色を見る如く黒も赤も有

水藥 薄赤色の金氣茶を云但火間まぐの茶

溜りの内かへる茶あり大海芋の子等乃

茶入ふ也あるものなり

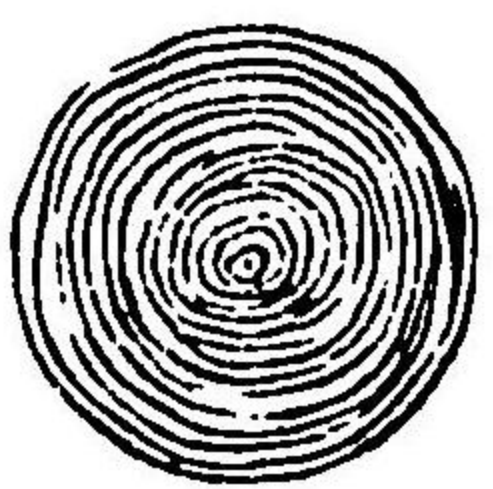
梨地藥

銀梨地をえらぬ上作物あり

右十四品

藥の色ハさまぐく^{ナシ}変ぢるものなり尤も濃色ありて
茶入と小ぢる事なり唐物の茶入ハ此類多し藤田^{ナシ}他と
り^{ナシ}在唐の節彼地とてさぐく乃茶入を焼日本へ出持ゆり
世に弘めたり或ハ唐の土を持ゆり^{ナシ}瓶子密ぢて焼くる杯
も^{ナシ}も異国よりハ萬の粉壺小用也と云

一系切

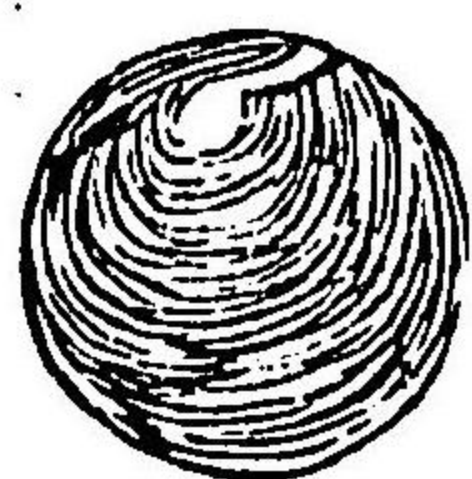


此系切ハ上作物あり^{ナシ}癖^{ナシ}癖^{ナシ}目^{ナシ}カ^{ナシ}ハ^{ナシ}見

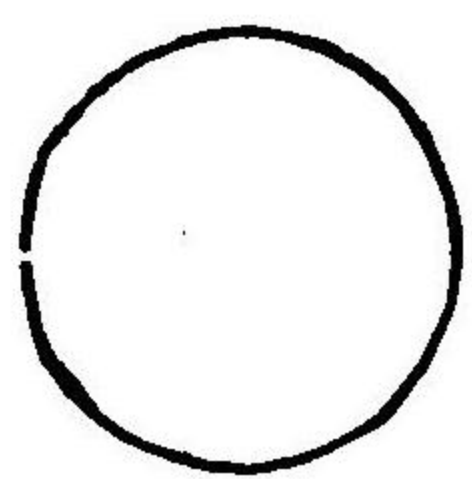
おちぢり



是ハ右廻りなる、瀬戸焼の糸切ハかくの如く作り切らあり



唐物の糸切、左廻りなる、唐物の手曲なる、外の茶入亦なるさまあり



鏡起一底ハさうらうら底を鏡起一も板起一とも云茶入の下地を作り起し



手の上ハさうらうら手の勢が板目ハさうらうら滴糸切如此とて深く滴糸切ハさうらうら、是狼手茶入の手癖引掛なる、外の茶入ハ

さうらうら手の勢が板目ハさうらうら茶入ハ有と云

東土と云ハ茶入の底を丸く作りたるを又ハさうらうら底と云ハ作り直して指してはさうらうらさうらうら

一尾田印他の茶壺ハ此花押のあらをえらんと、或ハ物作ハさうらうら判りたる、一尾田印其法を得たるはさうらうら、也後茶壺のハさうらうら



一尾州瀬戸の恭澄院ハ、遠州秋葉山の役僧ハ、山伏あり、元祖

藤四郎以来、瀬戸密本の祈禱寺也、今も境杣密寺と
安全の加持を勒るべく、此寺の本尊ハ不動尊也、則
藤四郎の守り本尊也、堂前ハ駒犬大小ニ頭あり、藤四郎
作也、奇代の物あり、當院ハ瀬戸の密印あり、當住洗心洞
逸本より、福井兩洗へ奇贈のぞし

永祿六年信長公御国御巡見之節、瀬戸ニテ名家六作ト

定ラレ 長十 丁 新兵衛

○ 俊白 十 茂右衛

□ 宗右衛 口 市右衛

天正十三年古田織部公重勝又瀬戸ニテ名家十作ト定ラレ

七 半七 廿 六兵衛

山 吉右衛 セ 治兵衛

カ 八郎二 の 佐介

一 元藏 ㊦ 友十

田 金九郎 イ 丈八

以上

本朝陶器攷證四

4
3
252

